

水とともに

第14部 私の提言 再生へ

—ふるさと、信州の川をどうみる。

「松本で生まれ、今も松本には別荘があります。見る度に川の自然が失われていくようです。小学生のころ泳いだ薄川は護岸工事で近寄れなくなり、もう川ではないという気がする。女鳥羽川も田川もしかり。胸が痛みます。」

—工事は水害防止が大義名分だが。

「治水、砂防という目的自体は分かれます。けれど、環境への配りを怠りすぎました。例えば、百年に一度の確率で降る大雨に耐えられる河川改修、といった言葉をよく聞きます。裏をかえせば、その大雨が降る時以外の九十九年間は、必要以上に河川環境を破壊し続けることになるわけです。」

「工事をやればいいという、列島改造ブーム当時から土木行政の体質の端的な表れだと思っ。公共工事の補助金獲得に走り、理念を見失っていないだろうか。わが信州は、山紫水明といわれるが、ぐんぐんコンクリート化されていく川の状態を見る限り、私には悪(あ)しき近代化を押し進めていると感じられてなりません。」

「百年に一度」のために、日常の自然がすべて壊され、しかも一度コンクリート化されるともう簡単に元には戻らない。これは大問題じゃないですか」

環境を発展戦略に 水辺奪った近代化志向

「自然河川を残す改修の技術が、もっと研究されるべきです。そのことにお金をかけなければ、取り返しがつかなくなる。日本は経済力を軍事に振り向ける必

要が薄くなってきている時ですか。ら、なおさらだと言えましょう。」

「水辺環境の破壊が進んだ背景ものが、工事をたくさんやったり、という傾向となって表れたのう。」

「近代技術を否定する自然絶対視の立場を良しとするわけでは毛頭ありません。けれど、信州の国際化にしても、身近な自然環境が、世界に通じるコア・ヴァリュー(核になる価値)となるはずで

東京外語大教授 中島嶺雄さん



「なかしま・みねお」国際関係論・現代中国学専攻。東京外大海外事情研究所長。著書に天安門事件を中心に書き下ろした「中国の悲劇」のほか、「北京烈烈」「現代中国論」など。

「アジア・オープン・フォーラム」日本側世話人、文部省重点領域研究「東アジア比較研究」の代表なども務める。松本深志高から東京外大、東大大学院卒。東京都板橋区常盤台。54歳。

ではないか。明治維新にさかのぼる性急な近代化志向そのものだという気がします。水辺環境をこれ以上、土木工事の犠牲にしてはいけません。自然環境こそが、信州の生き残り発展の戦略であるはずですよ。」

—国際的な目からはどうか。
「中国がまさにこれから自然を壊そうとしている。民主化運動を抑圧する国に、環境問題までを考える余裕はなく、近代化に突っ走ろうとしています。これからは、その国の文化的な成熟度が、国際社会で評価される重要なファクター(要因)になっていきます。日本は脱皮する時です。海外援助も、単に工業化推進でなく、環境保護の技術を提供できれば、高く評価されるに違いないでしょう。」